

## 有賀千佳

有賀千佳の作品は、見慣れない、と同時に不思議な信頼感のある世界へとまなざしを解き放つ。私達は、建物やその断片を暗示するものを認識できる中に、広大な花の咲き誇る風景の中へ浸るような、または庭園の中へ入っていくような印象を受ける。しかし私達は一つの対象をはっきり見極めようとはしないだろう。花の咲き誇る風景は、いくつもの異なった層へと混じり合い、色空間は様々な深さで重なり合い、その境界は花に似た形象で絶妙に覆い隠され、最初の印象はその中へと溶け込んでいく。建築的な要素は色の海を泳ぐように見え、私達はその色相のベールの奥の構造を認識するというよりは予感するであろう。

有賀千佳の作品は、抽象と形象描写、ミクロとマクロの構造、そして異なった集合体の間を動いている。それらは純粋な抽象構成ではなく、枝、種を包んでいる莢、脈間または細胞、そして山脈または水域のような具象形態を思い起こさせるものだ。彼女の最新作ではこれらのモチーフはさらに具象的になり、花や建築的な要素が現れ、混ざり合い、浸透し合い、独特の詩的な空間を作り出している。この日本で生まれ育った芸術家は、ブレーメン芸術大学を卒業する前に東京で美術大学を卒業している。それ故に、ここで誕生した彼女の初期作品が、既に独自の作風を私達に認識させる事に驚きはしない。

この時期に制作された大変大きい作品群では、重なり合い置かれた透明な層が築き上げられ、全ての方向に開かれた構造は、特有の空間を提示している。揺れ動きまたは密な構成を組み合わせた小さな形成物は、例えば、私達が海の底や生きている存在の内側に見つける事ができるかもしれない、顕微鏡で拡大した微生物の細胞を想像する事が出来る。深い赤、茶色そして青黒の色調は、明るく鮮明な白、赤、マゼンタで画面全体に広がって、揺れ動くように見える花のような生物のような形成物の上方で背景を形成し、またある深さを暗示している。

このパターンは次の段階では多かれ少なかれ輪郭を持った形へと、認識出来る具象化する事なく強まっていく。背景の小さな形象物は均一な色面に替えられ、その中に不思議な形成物を見つける事の出来る、力強い超現実的な空間が生まれている。例えば、球体の形をしたカプセルを開いたような形成物から枝が生え始めている2004年（8ページ）の作品のように。

有賀千佳の制作方法は、初期は無意識的にエスキースなしで、または躍動的な身振りでキャンバス上にのせた色の形や流れから作品を決めていき、インスピレーションと直感が先行していた。しかし、徐々に彼女のはっきりとした作品構成への欲求は大きくなり、何年か前からは新しい構成を作り出す為に、作品のアイデアをデッサン、写真、または言葉としてスケッチブックに納めるようになった。時が経つうち、山頂や花咲く野原などの風景の要素が現れるようになり、個別化した具象形象を彼女の構成の中に入れ始めるようになった。奥行きと平面が作り出す緊迫の場は失われる事なく、確かに変化したのだ。表面と奥行きの境の明確さは更にぼやけ、前景と背景は、まるで一目では分からない隠し絵のように、あちらへ行ったりこちらへ来たりという知覚を生み出す、困惑的な結合へ向かって行く。

もし彼女の初期の流れるような色空間が、はっきりとしないまだ説明のつかない形成物に浸る事から、波立つ原始の物質を想像する事を許すのならば、私達は凍結した水辺に泡立つ波や氷の花を想像させられる。この印象は、繊細なニュアンスの青そして碧青の色調に助長されている。これらの作品の中にこの芸術家の背景を感じ取る事が出来る。強い装飾性のある要素はエレガントな線の描き方によって強調されている。彼女の最新作では、描写方法が具象形態の増加と平行して風景的、植物的な対象をテーマにし、強く類型化して来ている事に気付く。

有賀千佳は、作品の中に超現実的な叙情的な方法で、見える物と見えないもの、存在する物と考えられた物、自然物と人工物、自然のままの物、構成された物を繋ぎ合わせていく。このようにして彼女は、鑑賞者に自分自身の幻想と意味を見つける場を残しながらもその作品からは連想する事を求められる、新しくすばらしい結びつき（繋がり）を成し遂げているのだ。

美術評論家 カテリーナ ヴァッセラ